

## 我が身を滅ぼす

### 【聖書】 エゼキエル書8章1～13節

第六年の六月五日のことである。わたしは自分の家に座っており、ユダの長老たちがわたしの前に座っていた。そのとき、主なる神の御手がわたしの上を下った。わたしが見ていると、人の有様のような姿があるではないか。その腰のように見えるところから下は火であり、腰から上は琥珀金の輝きのように光輝に満ちた有様をしていた。彼が手の形をしたものを差し伸べて、わたしの髪の毛の房をつかむと、霊はわたしを地と天の間に引き上げ、神の幻のうちをわたしをエルサレムへと運び、北に面する内側の門の入り口に連れて行った。そこには、激怒を起こさせる像が収められていた。そこには、かつてわたしが平野で見た有様と同じような、イスラエルの神の栄光があった。彼がわたしに、「人の子よ、目を上げて北の方を見なさい」と言ったので、北の方に目を上げると、門の北側に祭壇があり、入り口にはまさにその激怒を招く像があるではないか。彼はわたしに言った。「人の子よ、イスラエルの人々がわたしを聖所から遠ざけるために行っている甚だ忌まわしいことを見るか。しかし、あなたは更に甚だしく忌まわしいことを見る。」

彼はわたしを庭の入り口に連れて行った。見ると、壁に一つの穴があるではないか。彼がわたしに、「人の子よ、壁に穴をうがちなさい」と言ったので、壁に穴をうがると、そこに一つの入り口があるではないか。彼は、「入って、彼らがここでやっている邪悪で忌まわしいことを見なさい」と言った。入って見ていると、周りの壁一面に、あらゆる地を這うものと獣の憎むべき像、およびイスラエルの家のあらゆる偶像が彫り込まれているではないか。その前に、イスラエルの長老七十人が、シャファンの子ヤアザンヤを中心にして立っていた。彼らは、それぞれ香炉を手にしており、かぐわしい煙が立ち昇っていた。彼はわたしに言った。「人の子よ、イスラエルの家の長老たちが、闇の中でおのおの、自分の偶像の部屋で行っていることを見たか。彼らは、主は我々を御覧にならない。主はこの地を捨てられたと言っている。」彼はまた、わたしに言った。「あなたは、彼らが行っている更に甚だしく忌まわしいことを見る」と。

### 【序】 ご挨拶

今日は久しぶりに宇都宮教会の皆さんとご一緒に礼拝とお交わりを共に出来ますことを、感謝します。来週は皆さん方の代表を川越教会にお迎えします。楽しみにお待ちしております。当日は川越祭りで町が賑わいます。伝統の行事をもご観覧いただけたらと思っています。川越教会は会員30名、礼拝25名ほどで高齢者が多く、私も後1年半で引退しますので、後任者を探し始めています。御加禱下さい。

私たちは聖書教育のカリキュラムで成人科三クラスが分級を行っていますので、こちらと同様に夜の祈祷会でその箇所の聖書研究を行い、礼拝説教も同じ聖書の箇所で行っています。宇都宮教会は独自の聖書通読表に基づいて説教をなさっておられるそうですが、今日は川越流で試してみたいと天野先生から要望されました。そこでエゼキエル書の第2回目の説教をさせていただきます。

## [1] エゼキエルの召命

ダビデ、ソロモンで栄えたイスラエル王国はその後、北と南に分裂しました。そしてサマリアを都とする北イスラエル王国は、**紀元前 721 年**にアッシリアにより滅ぼされます。エルサレムを都とする南王国は、それから124年後**紀元前 597 年**にバビロンによってエルサレムを占領され、王以下重だつた家臣が捕囚として連れ去られます。その中に祭司エゼキエルも居ました。**第一次捕囚**です。

ところが続いて王になったゼデキヤも、初めはバビロンに貢物を差し出していましたが、やがて反旗を翻して、11 年後にエルサレムも神殿も破壊され、王は両眼をつぶされた上で、貧しい民を除く多くの民と共に捕囚となり、王国は滅びました。**紀元前 587 年**の**第二次捕囚**です。イスラエルの民がバビロンから帰国できたのは約 70 年後のことでした。

エゼキエル書の書き出し。「**第三十年**の四月五日のことである」「ヨヤキン王が捕囚となって**第五年**の、その月の五日のことであった」。第一次捕囚は **BC597 年** ですから、5年目とは **BC 593 年** ということになります。すると**第 30 年**とは？いろいろな説がありますが私は**エゼキエルの年齢**だと受け取ります。主イエスが宣教活動を開始されたのも **30 才**の時でした(ルカ 3:23)。

もしもエゼキエル 30 才の時だとすると、彼は **26 才**で捕囚となり、バビロンに連れて来られたこととなります。祭司の家に生まれ、いよいよ伝統のあるエルサレムの神殿で祭司としての務めにつこうとしていた時に、遠い異国での**捕囚生活**が始まりました。愛する**民族の将来**はどうなるのでしょうか。そしてこの**自分**はどのような生涯をたどることになるのでしょうか。

捕囚生活それ自体は、首都バビロンから 100km ほど離れた**ニップル**という町で、捕囚の民がまとめて暮らすことを許されましたから、さほど不自由ではなかったようです。しかしそれから5年後には都の**エルサレム**も**神殿**も破壊され、王国は**滅亡**する情勢へと進んで行くのです。エゼキエルの若い魂に**絶望の暗雲**が色濃く覆い始めていたことでしょう。

30 才になったエゼキエルは、バビロンの**ケバル川**のほとりにただずんでいました。すると突然不思議な**霊的体験**を与えられたのです。激しい風が大きな雲を巻き起こして吹いてきました。**雲は火を発し、光を放っています**。火の中に琥珀金の輝きのようなものがあり、また4つの**生き物**の姿がありました。その生き物にはそれぞれ**4つの顔、翼、手、足**があります。正面の顔は**人間の顔**、左右は**獅子、牛**、後は**鷲**の顔。向きを変えずに自由に四方に進める足。更に体の下には四方に進める**車輪**までついていて、霊が行かせる所に自由に移動できます。生き物の姿は**燃える炭火・松明**のように輝いて行き巡っていました。

大きな**翼**が羽ばたく音は全能の**神の御声**のように聞こえます。生き物の頭上の大空にサファイヤのように見える**王座**と、虹のように**光を放つお姿**が見えました。これが**神の栄光の姿**で、エゼキエルはその場に平伏しました。そして語りかける**神の声**を聞きます。こうしてエゼキエルは、神の語りかけ

る言葉を聞いて、人々に語る**預言者としての任務**を与えられたのでした。

エゼキエルが経験したこの霊的体験は、彼にとってどのような意味をもつものだったのでしょうか。先ず、**火や光を発する雲**——これは現在の境遇と将来に希望が見出せず、意気消沈して絶望に呑み込まれようとしている若者に、**希望と意欲と喜び**をもたらす**神の迫り**を表わしているのではないのでしょうか。

四つの顔を持つ不思議な生き物。獅子は**勇気**、牛は**力**、鷲は翼で大空を駆け巡る**自由さ**、人間は**理性、知恵**でしょうか。更に仕事をする手、四方に動ける足、更により自由に動き回れる車までついている体。若いエゼキエルは、捕囚生活によってすっかり意気消沈し、心も体も**束縛感**に覆われていたのでしょうか。

そうです。巨大な帝国の捕囚となり、バビロンの宗教や文明、軍事力を目の当たりにして、誰でもその支配力に押しつぶされそうになります。でも**真の神**は違います。**真の神はすべてを支配し**、自由であり、何処であろうとも**救いの御業**を行って下さるのです。信じて聞き従う者に真理を示し目標と希望を与え、**力強く導いて**下さるのです。**困難にくじける**ことはないのです。エゼキエルは、主の霊に励まされて、預言者として、主の示される言葉を語り始めました。

## [2] 変わり果てたエルサレム

さて今日の聖書の箇所**第8章**は1年2ヶ月後のことです。バビロンでユダの長老たちと会合していたエゼキエルは、突然主の手に髪の毛の房をつかまれて空中に引き上げられ、**エルサレム**に連れて行かれる**霊的体験**を与えられました。そして捕囚を免れてエルサレムに残って暮す人々の姿を示されたのでした。**望郷の思い**に駆られるエゼキエルたちにとっては、**一番知りたいこと**でした。

ところがそこは、**捕囚前とは全く違って**、神ならざる神々を拝む様々な**偶像礼拝**の行われている**異教の都**、神の激しい怒りを招く都に**変わり果てて**いたのでした。先ず門の入り口に偶像が祀られています。多分大地の生産力を神とするカナンの主神**バアル**の妻**アシュラの像**でしょう。門を入ると祭壇があり、他の偶像が祀られています。内庭に壁で仕切られた一郭があり、入ってみると、壁一面にあらゆる**地を這うもの**と**獣の像**とあらゆる**偶像**が彫り込まれています。

暗い秘密の部屋の内では、ヤアザンヤを中心にして**70人の長老**たちがそれぞれ**香炉**をくゆらせて、偶像に礼拝を捧げています。ヤアザンヤの父**シャファン**はヨシヤ王が行った神殿修理の最中に発見された**律法の書**を、王の前で読み上げた書記官です。そしてその律法の書に基づいて、**ヨシヤ王の宗教改革**が行われたのでした。そのような人物の息子が、偶像礼拝のリーダーに変心していたのでした。

外庭には女たちが座って**タンムズ神**のために泣いています。その神は夏至になると暑さで**力を失い**、植物を枯らしてしまうので、**女たちが泣き続けると**、秋には**元気を取り戻し**植物を実らせてく

れるのだそうです。女性たちの流す涙で元気を取り戻す神、何と情けない神でしょうか。更に聖所の入り口で 25 人ほどが、こともあろうに**聖所に背を向けて太陽**を拝んでいます。

エゼキエルに**神の声**が聞こえてきました。「人の子よ、見たか。ユダの家がここで**数々の忌まわしいこと**を行っているのは、些細なことであろうか。彼らはこの地を**不法で満たした**」「わたしも**憤って行い**、慈しみの目を注ぐことも、憐れみをかけることもしない」。こうして、主なる神の厳しい裁きの言葉が 11 章まで続きます。

国王以下重だつた人たちが遠くバビロンの地に捕らえられていきました。**国家危急存亡の危機**にさらされたのです。今こそアブラハム、モーセより受け継いできた信仰に立って、**主なる神**に心を注いで**助けと救い**を祈り求めなければならないのではないのでしょうか。ところがエルサレムに残された人々はそれぞれに、**神ならざるものを神として拝む**ようになっていました。どうして？

12 節をご覧ください。「主は我々を御覧にならない。主はこの地を**捨てられた**と言っている」。主は高い天の彼方におられて、地上の自分たちの苦しい状況を見ておられない。主はこのエルサレムを見捨ててしまわれたのだと言っているのです。そして頼るべきものを手近に見つけ出し、あるいは造り出して、拝むようになってしまったのです。

### [3] 国全体が誤った心の状態になる恐ろしさ

神ならざるものを神として拝み、身を滅ぼしていく——私は我が国日本が、世界を相手に戦争を遂行していた戦時中に、私が受けた教育を思い浮かべました。学校の正門と玄関との中間に**奉安殿**という小さな神殿が設置され、**天皇・皇后の写真と教育勅語**が奉納されていました。生徒・教師ともにその前を通る時は、帽子をとり最敬礼をします。忘れると体罰です。全校の儀式の時にはモーニング姿の教頭先生が、御真影と勅語を取り出して講堂の正面に御真影をかざります。式は御真影への最敬礼で始まり、校長先生の**教育勅語朗読**を最敬礼を続けて聞きました。

**修身**の授業は教育勅語の斉唱から、**歴史**の授業は神武天皇から 124 代の天皇の名前を斉唱してから始まりました。我が国日本は、**天照大御神**を祖先とする神の御子孫、万世一系の**天皇**を戴く世界唯一の**神の国**なのだ、その**現人神**天皇陛下に心身を捧げてお仕えすることこそ**臣民の義務**だと、教えられました。

そしてアジアを欧米の支配から解放し、アジア諸国が天皇を元首に戴く神の家族として共に栄えていくという**大東亜共栄圏**をスローガンに、アジア全域に侵略していきました。シンガポールにも皇大神宮の分社**昭南神社**を建てましたが、敗戦とともに市民によって真先に破壊されました。

神である天皇の国日本、**神州不滅**——鎌倉時代に元の大船団が九州に押し寄せた時、二度とも神風が吹き、大被害を受けて退却したのではないか。この通り神の国日本は決して滅びない。いざとなれば**神風**が吹くと教えられました。 **神風特攻隊**とは、飛行機もろとも敵艦に突入して神風を

呼び起こす決死隊でした。それを私たち国民は皆信じ込んでいたのです。こうして日本人は一億一心・火の玉となって戦争し、負けてしまいました。

これに比べると、エゼキエルが見たエルサレムの状況は、全く対照的です。宗教心は熱いのですが、人々はてんでばらばらに、神ならざるものを拝んでいます。しかし**神ならざるものを神として拝み、国を滅ぼしてしまった**という点では、私たち日本人と共通していますね。

諸国の民の祝福の基として神に選ばれ、アブラハム、モーセを通して導かれ養われてきたユダヤ民族に示されて来た**神の御心**を、王以下重だつた人々が捕囚にされてしまったという出来事で、エルサレムに残された人々は、**見失ってしまいました**。「**主はこの地を捨てられた**」雪崩に巻き込まれるように、皆がその思いに染まってしまったのです。そして思い思いに、神ならざるものを神として拝み始めたのでした。

### [結] イエス・キリストを信じて生きる

「今ほど人それぞれが**救い**を望み、求めている時はない。ただ**本当の救い**に連れて行ってくれる人がいないのだ」とある人が書いていました。そうですね。多くの人が願い事を抱えて、神社やお寺に参詣し、お札を買い求め、それを大切に日々願ひ事を訴えています。なかなか願ひがかなわないと、別の神社やお寺にお参りします。エゼキエルが見たエルサレムと同じ光景です。

しかし今日の聖書には、**激怒を起こさせる像**(3節)(口語訳では**ねたみ**をひき起こす**ねたみの像**)、**激怒を招く像**(5説)(口語訳**ねたみの像**)、**甚だ忌まわしいこと**(6、13、15節)(口語訳**憎むべきこと**)、**邪悪で忌まわしいこと**(9節)(口語訳**悪しき憎むべきこと**)、**数々の忌まわしいこと**(17節)(口語訳**憎むべきわざ**)と言う言葉が繰り返して語られています。これでは神は神殿に留まれません。礼拝と称して彼らが行っている行為が、**真の神を遠ざけるもの**だからです。

国王以下、主だった民がバビロンの捕囚となつてしまった**国家的危機の時**だからこそ、神がご自分の民と共にいて、彼らを救いに導こうとされているのに、その神を遠ざけ、勝手気ままに滅びの道を進んでいる。その姿に**真の神**が、いてもたってもおられず、激怒しておられるのです。

神は預言者**エレミヤ**をエルサレムに残して、民に語り続けておられます。エレミヤは**首に輓をはめて**(エレミヤ27章)不信仰に対する**神の裁き**を予告しますが、民は聞き従いませんでした。エゼキエルはバビロンの捕囚の地で、幻によってエルサレムの現状を示され、神の激しい**愛の嘆きの叫び**を聞き、語り続けますが、民は悔い改めません。私たち人間は皆、**危急の時**になればなるほど**自分の思い**に駆られて、**真の神の声**に聞き従うことが出来なくなるのですね。

そこで神は遂に、**ナザレのイエス**という一人の人間となつて私たちの間に生まれて下さり、神の言葉を語り、救いの御業を行い、弟子たちを育て、**十字架**について死んで下さり、私たちの罪を贖う**救いの業**を成し遂げて下さったのでした。そして墓から復活されることによって、**死**が滅びではなく、

永遠の命の新しい出発であることを示して下さいました。この人となられた救い主イエス・キリストを私たちに証ししてくれているのが、**新約聖書**です。

そこで新約聖書は語ります。「**神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである**」(ヨハネ3:16)。「神は、かつて**預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで**先祖に語られたが、この終わりの時代には、**御子によってわたしたちに語られました**」「御子は、神の栄光の反映であり、**神の本質の完全な現れであって**」(ヘブライ1:1, 3)。

私たちは皆、救いを求め、救いを望んでいます。真の神も、私たちを愛し、救いにあずからせようとして下さっています。しかし私たちは皆、**危急の時**になればなるほど、**自分の思い**に駆られて、**真の神の声**に聞き従わなくなり、神ならざる神・偶像礼拝に走り、我が身を滅ぼしてしまうのです。

**御子は神の本質の完全な現れである**——イエス・キリストの十字架の死には、**罪の裁きの厳しさ**と、**神の愛の深さ**が完全に現わされています。私たちはこの十字架の救いを信じることによってのみ、**真の救いの恵み**にあずかるのです。

ただ祈るだけではだめです。**聖書に書き記された神の言葉**、その中心である**イエス・キリスト**によって語られる神の言葉を、読み、聞き続けることです。そしてキリストを信じて、真の神の御手の中で、生きることです。聖書を共に学びつつ、礼拝をしっかりと守り続けて参りましょう。全能にして愛の神が、共に歩み、導いて下さいます。

祈ります:神さま、今日のエゼキエル書で、私たちは、あなたの激しい怒りを繰り返し聞きました。あなたに背を向けて、神ならざるものに礼拝を捧げ、滅びの道を歩む多くの民の姿に、じっとしておれないあなたの愛が、激しい怒りとなって叫ばれています。我が身を滅ぼす罪の道を進まぬように、あなたの命の御言葉を絶えず聞き続け、信仰をもって生きる者にして下さい。愛する家族、友人に救い主キリストの言葉を伝える者にして下さい。私たちの国をお救い下さい。主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン